

辺 清音

1. 事業実施の目的

世界海外華人研究学会 2015 年度地域会議での成果発表

2. 実施場所

韓国・ソウル

3. 実施期日

平成 27 年 5 月 28 日 (木) から 6 月 1 日 (月)

4. 成果報告

●事業の概要

世界海外華人研究会 (The International Society for the Study of Chinese Overseas, ISSCO) は 1992 年に設立され、目的は、華僑・華人を研究対象とする世界中の研究者が集まり、研究を進め、交流することである。学会誌『華人研究』(Journal of Chinese overseas) は年 2 回発刊され、民博の図書室にも収録されている。

本学会は毎年地域会議を行い、3 年毎に国際会議を開催する。2015 年の地域会議のテーマは「東アジアと華僑・華人」(East Asia and the Chinese Overseas) であり、韓国・ソウル国立大学国際研究大学院で開催された。

今回の会議では、25 のセッションがあり、「ヨーロッパにおける華僑・華人：変動中の政治とインタラクティブな経済」、「東アジアの近代史における華僑・華人」、「トランスナショナルな〈チャイニーズネス〉：多元的な中華文化と芸術の再構築」、「歴史・現代的な中国出身のハイテクノロジー移民」などのテーマが設けられた。

参加者は日本、韓国、中国、台湾、香港、ベトナム、マレーシア、インドネシア、シンガポールやアメリカなどから 100 人前後であった。それらの研究者は人類学だけでなく、社会学、政治学、歴史学、地理学などを専攻とし、それぞれの観点から、東アジアをはじめ、東南アジア、ヨーロッパやアメリカにおける華僑・華人に関する最新の研究成果を発表し、議論した。

申請者はこの国際的な学会に参加することによって、日本、東南アジアやヨーロッパにおける華僑・華人の最新の状況を把握することができた。また、中国の国境を越えて移動したチベット族やウイグル族、カザフ族の移民の歴史と現状もわかった。更に、多分野の理論と分析の枠組みを勉強することができた。

今回の会議では、申請者は多数の発表を聞くことができた。その中に、自分の研究と最も近い日本の華僑・華人に関する 2 つのセッションに参加した。

**セッション 13:**「東アジアのトランスナショナルな移動とその移民：地域秩序、国際関係

と移民のネットワーク」(Border-Crossing and Transnational Migration in East Asian: Regional Order, Inter-State Relations and Migration Network)

このセッションにおいて、日本の華僑・華人に関する発表は3件あった。王維氏、張玉玲氏と廖赤陽氏は、長崎における華僑・華人の芸能、神戸における福建出身の華僑・華人の組織、日本華僑・華人社会の変遷のプロセスについて、それぞれ発表した。

**セッション 25: 「在日華僑・華人：地域社会とその集団における現在の発展」(Overseas Chinese in Japan: Contemporary Developments in its Locality and Community)**

このセッションにおいて、申請者は発表した。また、呉前進氏は現在の日本における中国人留学生の社会的な適応を論じ、湯熙勇氏は1950年代からの台湾系の日本華僑学校について発表した。

申請者は以上のセッションを通して、日本の華僑・華人に関する最新の研究状況を把握することができた。それと同時に、これらの発表は華僑・華人社会の内部を詳しく分析しているが、華僑・華人と地域社会の具体的な相互行為について、詳細な論述がなかったことも確認できた。

●学会発表について

申請者はセッション 25: 「在日華僑・華人：地域社会とその集団における現在の発展」(Overseas Chinese in Japan: Contemporary Developments in its Locality and Community) で、「神戸中華街をめぐる社会的生産と構築について」(Social production and social construction of Kobe Chinatown in Japan) を発表した。

本発表の目的は、文献調査によって1868年の開港から2000年代までの神戸南京町の形成プロセスについて考察することである。具体的な発表内容は、市場としての南京町から、外人歓楽街としての南京町、更にテーマパークとしての南京町が生産され、構築されてきた過程の分析により、華僑・華人、西洋人や日本人などを含む多様なエスニック集団の役割を明らかにした。

本発表について、日本国内外の研究者から、以下のような評価とコメントをいただいた。

1. 人類学の研究に歴史学の視点を取り入れることにより、神戸南京町の形成プロセスとその主体を、歴史的な脈絡で考察することは重要である。

2. 華僑だけではなく、多角的な主体の相互行為に注目することはチャイナタウン研究の新たな展開をもたらす可能性がある。

また、今後の博士課程の研究に対し、以下のような助言を受けた。

1. 本発表によって、1868年の開港から2000年代までの神戸南京町の形成プロセスを明らかにしたが、その中の人の動きを、今後のフィールド調査により、人々の相互行為としてさらに詳細に分析することが期待できる。

2. 今回の発表は華僑・華人を一枚岩のように論じたが、今後の調査により華僑・華人内部

の多様性について考察する必要がある。例えば、老華僑/新華僑それぞれの南京町に対する認識を記録し分析することである。

●本事業の実施によって得られた成果

本事業の実施によって得られた成果は3つある。

1. 国際的な学会に参加し、世界における華僑・華人に関する最新の研究を聞くことで、世界の華僑・華人の状況を把握することができた。
2. 日本、韓国、中国、台湾、香港、ベトナム、マレーシア、インドネシア、シンガポールやアメリカの研究者と交流し、博士課程の研究に対する助言やコメントを得た。
3. 最新の華僑・華人研究と比較しながら、申請者の博士課程の研究のオリジナリティーと可能性を確認できた。

●本事業について

本事業のような枠組みにおいて海外学会で発表を行えるということは、学生にとっても非常に有意義なことである。

今回の学会で、学術的な刺激をたくさん受け、最新の研究状況を把握したうえで、博士課程の研究に有益な意見と助言を得た。国際的な学会に参加した経験を活かし、今後の研究を進めたいと思う。